

# 1911年中国人移民虐殺事件の諸相 メキシコ新興都市トレオンと中国人移民

佐藤 勘治

## Chinese massacre in Torreón, 1911 Chinese immigrants in a Mexican booming town

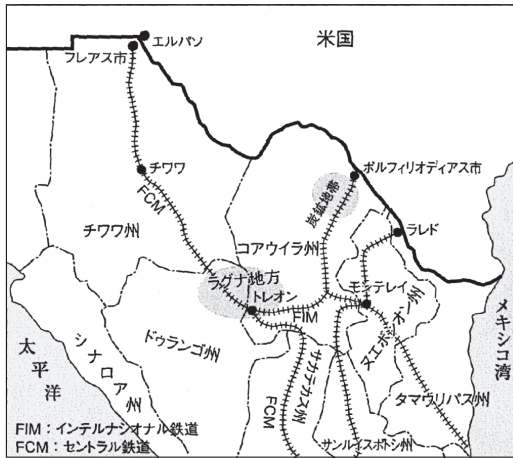
SATO Kanji

In May, 2021, for the first time, the Mexican government issued a formal apology at a ceremony marking the 110<sup>th</sup> anniversary of the 1911 massacre of Chinese in Torreón. The Chinese massacre occurred in the city of Torreón at the beginning of the Mexican Revolution. In the incident, Chinese immigrants in the town were looted by the locals and around 300 of them were killed by the rebels, *Maderistas*. This essay briefly describes the history of Torreón and its Chinese immigrants, and then gives details of the incident focusing on the places where they lived and worked, which were also the sites of the massacre. Mob violence is the key to understanding the incident.

### はじめに：110年目の謝罪行事

2021年5月17日、メキシコ大統領ロペス・オブラドルは、ラグナ地方 Comarca Lagunera の中心都市、コアウィラ州トレオン市 Torreón, Coahuila に駐メキシコ中国大使や中国系メキシコ人らを招いて、式典「メキシコ中国人コミュニティ迫害への謝罪を請う *Petición de perdón por agravios a la comunidad china en México*」を開催した。トレオン中国人移民虐殺事件（1911年5月）から110周年を迎え、中国および在メキシコ中国系市民にメキシコ国家として公式に謝罪するためである。2007年に州政府による謝罪行事が行われたことがあったが、国が主導する謝罪行事は今回が初めてである。式典では、「中国風ドラゴン」を特別あしらった民芸品「生命の木 *árbol de la vida*」が大統領から中国大使に贈られた<sup>1</sup>。

1911年5月の中国人移民虐殺事件とは、当時約600名の中国人移民が在住していたとされるトレオン市で、主に15日午前中の半日間でその半数にあたる約300人が犠牲となった事件である。アラン・ナイト『メキシコ革命』が指摘しているように、「外国」住民に対するメキシコでの虐殺としては、独立革命時、1810年、グアナファト穀物倉庫（アロンディガ）でのスペイン人虐殺事件以来最大の犠牲者数を数えた<sup>2</sup>。トレオン中国人虐殺事件は、メキシコ近現代史上最大の移民虐殺事件だっただけではない。南北アメリカでの他の中国人移民迫害の例と比べても犠牲者の多さが突出している。例えば、反中国人移民の動きで先行していた米国でも中国人移民に対してこれほどの規模の虐殺は生じていない<sup>3</sup>。



地図1 メキシコ北東部（1911年ごろ）

佐藤勘治『『邦人七名殺戮』の風説』：トレオン中国人移民虐殺事件と日本人移民』樋口映美編『歴史のなかの人びと：出会い・喚起・共感』彩流社（2020年）、39頁から転載。

- 1 この謝罪行事は中国に対する外交上の意味もあった。中国企業によるメキシコへの投資、ワクチン無償供与への感謝も同時に表明された。ロベス・オブラドル大統領は、先住民民族マヤ、ヤキに対する謝罪行事もおこなっている。
- 2 Alan Knight, *Mexican Revolution, vol. I, Porfirians, Liberals and Peasants*, University of Nebraska Press, 1990, p. 208.
- 3 米国反中国人暴動は西部各地で発生した。1871年ロサンゼルスで20人前後、1885年ロックスプリングズで28人が犠牲となった。1877年サンフランシスコ砂地暴動では18名の死傷者がでた。貴堂嘉之『アメリカ合衆国と中国人移民：歴史のなかの移民国家アメリカ』東京大学出版会（2012年）など参照。

式典では、中国人移民社会研究者シンコ Mónica Cinco Basurto と元駐中国メキシコ大使レイ Sergio Ley López が演説し、メキシコにおける中国人移民の苦難の歩みを紹介した。両者とも中国系メキシコ人であり、演説のなかでそれぞれの家族史に言及した。シンコ家の場合、19世紀末にメキシコに移民した第一世代の祖父がメキシコ人女性を配偶者とした。1930年代には、北部諸州で組織化され過激化した中国人排斥運動によって、1932年メキシコ生まれの祖母を含めシンコ家の家族は中国に追放された。中国から一家が帰還できたのは、1960年代であった<sup>4</sup>。元大使レイによれば、彼の父は事件があった1911年にメキシコに移民し、1932年メキシコ女性と結婚した。レイはその第5子である。一家は、排斥運動の嵐を避けて山中の隔絶された鉱山町でひっそりと生活した。その後、レイ家はクリアカン（シナロア州）で家業として自動車修理会社を起業し、各地に系列会社を展開するまでになった<sup>5</sup>。

この二つの家族史に示されているように、革命の進展とともに中国人排斥運動は組織され、第二次大戦ごろまで続いたのである。したがって、今回の謝罪式典は、1911年の事件だけを対象にしているわけではなかった。

家族自身がその被害者であった元大使レイは、演説内で「メキシコを代表して謝罪する」と述べた。メキシコ人出席者はそのとき一斉に起立して同感の気持ちを表した。被害者と加害者との切り分けることが不可能だという、この問題の奥深さが明らかになった瞬間でもあった。元大使の複雑な心情は、このとき式典参加者に深い印象をもたらしたように思われる。

この式典に付随して、翌18日、虐殺現場のひとつである旧「中国銀行ビル」の入り口外壁に以下の文言が記されたプレートが据えられた。

---

4 当時のメキシコ国籍法では、婚姻に当たってメキシコ女性は配偶者男性の国籍に変更された。中国に追放されたメキシコ人については、以下が詳しい。Fredy González, *Paisanos Chinos: Transpacific Politics among Chinese Immigrants in Mexico*, University of California Press, 2017, および Julia Maria Schiavone Camacho, *Chinese Mexicans: Transpacific migration and the search for a homeland, 1910-1960*, The University of North Carolina Press, 2012.

5 式典の全様子は、次のサイト（大統領公式サイト）で視聴できる。  
[https://www.youtube.com/watch?v=LKujtTCn\\_jw](https://www.youtube.com/watch?v=LKujtTCn_jw) (2021.11.27閲覧、以下同じ)  
 式典での全発言は文字に起こされている。以下の大統領府のブログを参照のこと。  
<https://www.gob.mx/presidencia/articulos/version-estenografica-peticion-de-perdon-por-agravios-a-la-comunidad-china-en-mexico?idiom=es>

この建物は、1907年、著名で学識豊かな中国人政治家・哲学者である康有為によって開設された。トレオン市発展における中国人コミュニティの貢献を示す建物だった。この場所は、1911年5月15日、トレオン市奪取の際、中国人虐殺の目撃者となった<sup>6</sup>。

文面にある「トレオン市奪取」とは革命軍による連邦政府からの「奪取」である。清末、戊戌の政変（1898）で日本に亡命した康有為とトレオンとの関係が明記されているのは興味深い。

トレオン中国人移民虐殺事件は、メキシコ革命（1910-1940）が最初に大きな展開をみせた権力交替時、権力の空白下で勃発したものである。マデロ Francisco I. Maderoによる武装蜂起の呼びかけ日（「サンルイスポシ宣言」）から約半年後、トレオンの位置するラグナ地方はほぼ全域がマデロ派革命軍によって掌握されていた。ラグナ地方は革命派の拠点のひとつだった。マデロは政治運動に関わるまでラグナ地方における進歩的農園経営者として名を馳せていて、地域からの革命支持が期待できたのである。そのなかで、鉄道交通の要衝であるトレオンは、例外的にラグナ地方で連邦軍が最後まで守備した都市であった。革命軍によるトレオン奪取（5月15日）は、北部国境都市フアレス市奪取（5月10日）とともにディアス政権崩壊を決定づけた出来事である<sup>7</sup>。ディアスは5月25日に大統領を辞任、月末パリに向かった。

謝罪行事に先立って、「ベネステシアノ・カランサの森」公園内に、中国人「農夫像 El Hortelano」が再設置された<sup>8</sup>。この公園は、当時「パホナル方面 Rumbo al Pajonal」と呼ばれていた場所である（パホナルは、低木地帯、藪だらけの未耕地の意味）。事件時にはトレオン市街から外れていたが、市が拡大

---

6 文言は地元紙『エル・シグロ El Siglo de Torreón』ウェブ版内写真による。“Develan placa en antiguo Banco Chino de Torreón,” 18 de mayo, 2021.

<https://elsiglo.mx/galeria/22460.develan-placa-en-antiguo-banco-chino-de-torreon>

7 フアレス市とトレオンは、ともに米国からの物資輸送の要である。メキシコ革命の命運は、米国との物的繋がり確保にかかっていた。ディアス大統領引退が決した「フアレス市合意」は5月20日である。

8 Luis Alberto López, “Regresan figura de El Hortelano al Bosque de Venustiano Carranza,” *Milenio*, 17 de mayo, 2021, で像の写真を見ることができる。トレオンの中国語表記「菜苑」は、おそらく野菜農園に関連している。

<https://www.milenio.com/estados/torreon-regresan-figura-hortelano-bosque-venustiano-carranza>

したことで今は市中にある。中国人移民は、この地を整備し野菜農園とした。虐殺の現場でもある。「農夫像」は、2007年に地元地方政府が行った謝罪行事に際して一度設置されたものである。しかし、その後2度にわたって何者かによって倒され、長い間、地元の中国系住民組織のもとで保管されていた<sup>9</sup>。

こうした事例が示すのは、反中国人感情をもつ住民が今日でも存在しているということである。のちに述べるように、虐殺事件に付随して生じた中国人商店や料理店からの略奪には住民の一部も加わっていた。殺害に関わっていた可能性もある。エルベル Julián Herbert は、近著でこの虐殺事件に関する現在の住民意識をいくつか紹介し検討し、現代のトレオン住民の多くが史実を歪めているとする。エルベルの収集した口承では、住民の虐殺関与が言われることはない<sup>10</sup>。

一般に、メキシコ史概説でこの事件が扱われることはなかった。近年になってメキシコ革命史に位置づける研究動向が生まれている。メキシコ革命とは一線を画する新たな変革を追求するロペス・オブラドル大統領としては、この式典をメキシコ革命再評価の場としたかたははずである<sup>11</sup>。大統領は、式典の演説で、メキシコ革命の先駆的運動とされているメキシコ自由党 Partido Liberal Mexicano が中国人移民排斥を主張していたことに特に言及した（本稿32頁参照）。

既発表論考と本稿の目的：筆者は、このテーマに関連する論考を計3編、そのうち2編を1998年に発表している。本論考と既発表論考との関係を簡単に述べておきたい。1998年論考のひとつは世紀転換期メキシコにおける東洋系移民の導入と国主導のメキシコ北部開発との関係を全体的に論じたものである<sup>12</sup>。トレオン中国人移民虐殺事件についても簡単に言及した。もうひとつの論考では、メキシコ北部における中国系移民排斥の例として、1911年トレオン虐殺事

9 2007年の謝罪行事の際には、先に述べた旧「中国銀行ビル」にもプレートが同時に置かれたが、そのプレートは奪われた。今回のプレートは新たに作り直されたものである。文言の異同については不明である。

10 Julián Herbert, *La Casa del Dolor Ajeno: Crónica de un pequeño genocidio de La Laguna*, Literatura Random House, 2015. 書名は、トレオン・サッカースタジアムの別称「アウェイの痛み」による。

11 大統領は、独立革命、レフォルマ、メキシコ革命の3つの歴史的画期と並ぶ時代として現政権を位置付けている。

12 佐藤勘治「メキシコ北部開発における東洋人移民労働者の役割」『アジア経済』第39巻第9号（1998年）。論題「東洋人移民」として中国人、日本人を対象とした。

件と鉾山町カナネアでの中国人移民に対する1914年暴動の概要を紹介した<sup>13</sup>。両論考とも、トレオン虐殺事件については既存研究に依拠した。

一次史料を用いることのできた論考「『邦人七名殺戮』の風説」(2020年)では、中国人移民虐殺が日本人移民に与えた衝撃を主に当時の移民自身の体験や日本公使館の対応を通して論じた<sup>14</sup>。日本人移民にとっても中国人虐殺事件は他人事ではなかったということである。新聞などでは当初トレオン在住の日本人移民も犠牲となったと報じられたが、調査の結果、日本公使館は日本人犠牲者なしと結論付けた<sup>15</sup>。上記論考では、エルベルの著書で検討されている地元住民のこの事件に対する認識、および2007年に作られたプレートと農夫像についても簡単に言及している。また、虐殺は中国人によるマデロ派への発砲から生じたとする地元住民の捉え方についても検討した。

既発表論考では、いずれも虐殺事件の経緯を具体的に記述することはなかった。本論考の前半部では、既発表論考で紹介した史料の一部も適宜参照しながら事件が発生した都市トレオンの形成史を論じる。中国人移民の生活の場であるトレオンは同時に殺害現場である。後半部では、事件に関する複数の調査報告書とトレオン在住外国人の記録を使って、上記論考では十分紹介できていない中国人移民大量虐殺の状況、「中国銀行ビル」や野菜農園など、事件当時のトレオンにおける中国人移民の虐殺のおおよその所在地を地図上で示しながら紹介したい<sup>16</sup>。殺害現場を論じることで、虐殺した側とされた側双方に目を向けることができるだろう。これほどの大量虐殺はなぜ発生したのか、「おわりにかえて」では、虐殺に至る背景について述べて今後の課題につなげる。

- 
- 13 佐藤勘治「メキシコ北部における反中国人暴動：1911年トレオン事件と1914年カナネア事件」『獨協諸学研究』Vol. 1, No. 2 (1998年)。
  - 14 佐藤勘治「『邦人七名殺戮』の風説：トレオン中国人移民虐殺事件(1911年)と日本人移民」樋口映美編『歴史のなかの人びと：出会い・喚起・共感』彩流社(2020年)。
  - 15 この式典で、大統領は5名の日本人移民が殺害されたと指摘した。この指摘は上記論考で述べたように誤りである。公使館の調査以降も日本人犠牲者は確認されていない。
  - 16 事件の推移を詳細に紹介した先行研究がふたつある。ひとつは、既出Herbert, *La casa*である。もうひとつは、次の先駆的研究である。Juan Puig, *Entre el río Perla y el Nazas: La China decimonónica y sus braceros emigrantes, la colonia china de Torreón y la matanza de 1911*, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, 1992.

## 「中国人の拠点」新興都市トレオン形成史

20世紀初頭、トレオンの中国人移民は、外国からも注目を浴びる目立つ存在だった。1911年にロンドンで発行された投資情報誌『メキシコ年鑑』は、商工業が発展するトレオンを有望な投資先として紹介するなかで、以下のように中国人移民に言及している<sup>17</sup>。

ラグナ地方の中心都市トレオンは、メキシコ産綿花のほぼ全てがここから供出されるコアウイラ州最重要商業都市である。(中略)物資供給センターであるだけでなく工業都市としても第一線に並びつつある。メキシコ最大級の精錬所と石鹼工場を抱え、ゴム工場、梱包所、機械工場、製粉所なども所在する。

トレオンには大きな米国人コミュニティがある。また、メキシコのリベラルな市民権法によって多くの東洋人が来住し、中国人の拠点にもなっている。

メキシコにおける「中国人の拠点」トレオンには、既に述べたように、1911年において600人ほどの中国人移民がいたとされている。どのような条件のもと、メキシコ内陸北部の地方都市に中国人移民が集中したのだろうか。

中国人移民：中国本土からメキシコへの中国人移民は、清・メキシコ間で移民の保護などを定めた「友好通商条約」(1899年)締結以前から存在していた。例えば、メキシコ南部のテウアンテペック鉄道の建設労働者として、1891年までに1200人が清朝政府の許可を得ずに導入されたことが知られている。港湾からの入国者数統計資料には、1884-91年間に4108人、1892-99年間では4032人と記録されている<sup>18</sup>。条約締結後1900-07年では1万8922人で、年平均にすると2000人ほどである。そのうちどれほどの中国人がメキシコにとどまったかは、正確にはわからない。半数ほどは北部国境線から不法に米国に渡ったと考えられている<sup>19</sup>。メ

---

17 *The Mexican Yearbook 1911; a financial and commercial handbook, comp. from official and other returns. Issued under the auspices of the Department of Finance, McCorquodale, p. 59.*

18 Leo Michael Dambourges Jaques, *The Anti-Chinese Campaigns in Sonora, Mexico, 1900-1931*, The University of Arizona, Doctor Dissertation, 1974, pp. 265-266.

19 David Dorado Romo, *Ringside Seat to a Revolution: An underground cultural history of El Paso and Juárez, 1893-1923*, Cinco Puntos Press, 2005, p. 200.

キシコ全土の中国人人口は、センサス調査によれば、1895年に915人、1900年2746人、1910年1万3203人である。ほぼ全員が単身男性だった。上記センサス年に記録されている女性数は、それぞれ19人、21人、85人だけである<sup>20</sup>。

移民の積極的受入を基本政策としていたディアス政権（1877-80, 1884-1911）は、中国人移民に対しても他の外国人と同様の保護を与えていた。1886年「外国人帰化法 Ley de extranjería y naturalización」では、6ヶ月以上居住した外国人は移民と認められ、さらに2年居住すれば帰化可能であるとされていた。また、外国人の土地取得についてもほぼ制限がなかった<sup>21</sup>。『1911年メキシコ年鑑』に「リベラルな市民権法のもと」とあるのは、そのような事情を指しているだろう。

19世紀末から20世紀初頭にかけてのメキシコ北部における中国人移民を論じる際には地続きである米国西南部での中国人移民の状況を知る必要がある。米国は、1882年排華法以来、中国人移民受入を禁止している。メキシコとの関連では、次の点が重要である<sup>22</sup>。人口希薄な米国西部における中国人移民は鉄道建設や鉱山開発など開拓初期の厳しい労働環境のもとで不可欠な労働力だったが、排華法成立の頃にはその役割を終えた。例えば、はじめての大陸横断鉄道が開通したのは1869年のことである。1883年には、ニューオリンズ・ロサンゼルス間で米メキシコ国境付近を走るサザンパシフィック鉄道が完成する。鉄道建設の終了は中国人移民鉄道建設労働者にとって失業を意味した。米国で中国人移民排斥を主導したのは、西部労働市場に参入し始めた新移民だったとされている。鉱山労働者では、メキシコ人が中国人移民の後を埋める傾向がみられた。

同時期、米国西部開発の波は、鉄道の伸長とともに国境線を越えてメキシコ北部に及んだ。鉄道建設や鉱山開発などメキシコ北部開発も主に米国資本が主導した。米国南西部とおなじく人口希薄なメキシコ北部でも、米国系企業は、鉄道建設や鉱山開発の初期段階において本国で使い慣れた中国人移民を求めることがあった。メキシコで働く米国人企業家や技術者の家内使用人としても中国人移民は重宝された。米国人、米国資本の進出とともに、中国人移民がメ

20 佐藤「メキシコ北部開発における東洋人移民労働者の役割」5頁、表1参照のこと。

21 外国人帰化法は、Código de Colonización y Terrenos Baldíos de la República Mexicana (Fernando F. de la Maza), Oficina de Secretaría de Fomento, 1893などで条項を確認できる。Art.12と Art. 13参照のこと。http://cdigital.dgb.uanl.mx/la/1080047387/1080047387\_100.pdf Grace Peña Delgado, *Making the Chinese Mexican: global migration, localism, and exclusion in the U.S.-Mexico borderlands*, Stanford University Press, 2012, pp. 34-35.

22 詳しくは、佐藤「メキシコ北部開発における東洋人移民労働者の役割」を参照のこと。



キシコ北部に現れたのである。ただし、米国側の中国人移民がメキシコ側に移動した例は多くない。一度出国すれば米国への再入国が困難だったからである。多くの同胞が居住する米国南西部では、この時期、クリーニング店などの自営業に就業の場を移していた。

1882年米国排華法は新規移民流入を禁止するもので、すでに米国に入っていた中国人を強制帰国させるものではない。排華法以降における米国側中国人移民の状況について、チワワ州フアレス市 Ciudad Juárez に隣接するテキサス州北西部エルパソの場合で見ておきたい。エルパソにサザンパシフィック鉄道が延びたのは1881年、メキシコ・セントラル鉄道に接続したのは1884年である。エルパソの人口は、1880年に736人だったのが、1890年には約1万人、1910年には約4万人に急拡大した<sup>23</sup>。エルパソには鉄道建設が終わると少なくとも1000人の中国人が職を失って残された。米墨国境の米国側では中国人移民の多くが、鉄道駅近くで、クリーニング店やレストラン、雑貨店経営など、自営業に進出した<sup>24</sup>。エルパソには、チャイナタウンも出現した。ロモ『革命のリングサイド席』によれば、自前の寺院、映画館、野球チームがあったほか、地区代表も選ばれていた。フアレス市の中国人人口は、地元紙によれば1911年に400人強、1917年851人とされている<sup>25</sup>。

メキシコでも、鉄道建設や鉱山開発の進展とともに中国人移民は自営業への移行が進んでいく。背景として、米国の中国人移民社会と距離が近いことで既に自営業で成功していた米国側の同胞から様々な便宜があったと考えられる。

メキシコ1910年センサスによれば、中国人移民がもっとも居住していた州はソノラ州4449人である。一般に、中国人移民は北部国境州の鉱山町や港に集中する傾向がある。ソノラ州は米国アリゾナ州と接しカナネア銅鉱山をはじめとする鉱山開発が進んでいたし、太平洋岸にグアイマス港もある。一方、トレオンがあるコアウィラ州は、米国テキサス州と接しているが内陸の州である。同センサスでは、中国人人口は745人、州ごとでみると第6番目であり、それほど多いわけではない<sup>26</sup>。

23 Julian Lim, *Porous Borders: Multiracial Migrations and the Law in the U.S.-Mexico Borderlands*, The University of North Carolina Press, 2017, p. 43.

24 Lim, *Porous Borders*, pp. 64-65, pp. 68-70など。

25 ただし、米国政府が行った1916年特別センサスでは243人である。Romo, *Ringside Seat*, pp. 198-201.

26 実数はもっと多かったと思われる。

以下、中国人移民のトレオン集中の要因を知るため、ラグナ地方の歴史とその中心都市トレオン形成史および都市の特徴を整理しておく。

ラグナ地方 Comarca lagunera : 「ラグナの真珠 Perla de la Laguna」と讃えられるトレオンは、ドゥランゴ Durango 州とコアウィラ州にまたがるラグナ地方の中心都市である。ナサス Nazas 川とアグアナバル Aguanaval 川流域に広がる盆地は、ラグナ（湖の意味）地方と呼ばれている。ナサス川の川筋に隣接するトレオン周辺地域も、以前は湖だった<sup>27</sup>。地域名のイメージとは違い、年間降水量600ミリほどの半乾燥地域である。しかも6月から9月までに集中する降雨は間隔が定まらず、旱魃に襲われる年もある。ドゥランゴ州の山地に発する両河川はコアウィラ州側に向かいナサス川は州境となる。流れは盆地の地下へ浸透し、見えなくなることが多かった。流れが地表に現れる場合でも、最後は盆地内の湖に至り、海への出口はない<sup>28</sup>。

1910年ごろ3万5000人ほどだったトレオンの人口は、現在、約60万人、ドゥランゴ州側でナサス川を挟んで隣接するゴメス・パラシオとレルドを合わせれば人口100万を超える都市圏を形成している。ラグナ地方は、州を超えた結びつきが強い。現在でも、それぞれの州から分離合体して独立州を形成するという運動があるほどである。

ラグナ地方の農業開発は独立後に進んだ。ナサス川の水量は不安定である。農業開発のためには水の安定的確保が重要であった。当時のナサス川は9ヶ月涸れていて、3ヶ月間は流れが激しかったという<sup>29</sup>。

ディアス政権による外資優遇策、土地政策、鉄道敷設の結果、ラグナ地方では外国人が多く土地を取得し、用水路の整備が進んだ。綿花栽培は1840年ころから始まり、1880年にはベラクルス州を抜いてメキシコ最大の綿花生産地となった。年間綿花収穫量は降水量に依存して大きく上下したが、1904年から

27 事件直前までトレオンに在住していた米国人女性トゥリータス Tulitas が古老の話として紹介している。トゥリータスは、トレオン市街を設計した後述する土木技師ウルフの娘である。トレオンでの生活を口述で残した。Tulitas Jamieson and Evelyn Payne, *Tulitas of Torreón; reminiscences of life in Mexico*, Texas Western Press, 1969, p. 12.

28 詳しくは、Mikael D. Wolf, *Watering the Revolution: An environmental and technological history of agrarian reform in Mexico*, Duke University Press, 2017, pp. 25-29.

29 Jamieson, *Tulitas of Torreón*, p. 12. ナサス川下流域で農園を経営していた「革命の使徒」マデロは、1906年、地元の有力者を集めてダム建設を求める会議を開催している。Wolf, *Watering the Revolution*, p. 3.

1909年の間では、メキシコ全土の綿花収穫量の約9割を占めた<sup>30</sup>。ドゥランゴ州側にあたるナサス川上流域では、ラビーンLavín家、ルハーンLuján家などスペイン人移民が5万ヘクタール前後の土地を取得して、借地農に貸し出すことで綿花栽培にのりだした。このような大規模農園にはそれぞれ2000人から4000人の定住労働者がいた<sup>31</sup>。

同じくナサス川上流域にあるトラウアリロTlahualiloには、1888年、メキシコ人16人の共同出資による単一経営の近代的綿花プランテーションが連邦政府の許可を受けて誕生した<sup>32</sup>。総可耕地面積は4万4000ヘクタールである。トラウアリロは、かつてナサス川の支流が注ぎ込んでいた湖であったが、1840年ごろに川の流れが変わって干上がり、湖底が現れた平坦な地となっていた。水さえあれば有望な耕作地である。かつての川筋に沿って80キロに及ぶ水路が建設された。1891年から半分ほどの面積で作付けが始まった。ラグナ地方は人口希薄で、労働力確保が課題だった。1893年には、黒人労働者1000人ほどが米国から導入されている<sup>33</sup>。1903年、資金の借入先であった英米資本に所有権が移行し、近代化が一層押し進められることになる。トラウアリロ社の農園まではインテルナシオナル鉄道の支線が引かれ、トレオンからの連絡も容易となった。各1700ヘクタール31の農園に分割して経営に当たった。労働者数は常雇2000人、臨時雇い6000人の計8000人であった。水分配をめぐって、河川を管轄していたメキシコ政府との間で裁判闘争が行われている。

このように、大規模農園の多くは外国人所有であった。メキシコ人農園主として重要なのは、すでに言及したが、1880年代ナサス川下流域サンペドロ

30 María Vargas-Lobsinger, *La Hacienda de La Concha: Una empresa algodonera de la Laguna, 1883-1917*, Universidad Nacional Autónoma de México, 1984, pp. 92-94. メキシコは綿紡績織物工業用原綿のうち4割を輸入に頼っていた。ラグナの綿花は国内で消費された。

31 William K. Meyers, *Forge of Progress, Crucible of Revolt: The Origins of the Mexican Revolution in La Comarca Lagunera, 1880-1910*, New Mexico University Press, 1994, p. 119.

32 ラグナ地方およびトラウアリロ農園の位置については、Wolf, *Watering the revolution* の目次前ページに掲載されている地図を参照されたい。

33 Meyers, *Forges of Progress*, pp. 127-128. 米黒人労働者のトラウアリロ導入については、Karl Jacoby, *Strange Career of Williams Ellis: The Texas Slave who Became Mexican Millionaire*, W.W. Norton & Company, 2016. が詳しい。米黒人労働者導入は失敗に終わった。同時期に流行した天然痘によって黒人労働者多数が死亡し多くが帰国した。米黒人労働者のメキシコへの導入は他の例もある。

San Pedro de las Coloniasに総計16万7000ヘクタールの土地を入手したマデロ家である<sup>34</sup>。マデロ家は、トレオンから東に130キロほどに位置する町パラスParrasを拠点にしていた名家である。最も著名な一員であるフランシスコは、1911年11月にメキシコ大統領となる。フランシスコの祖父エバリストEvaristoは、コアウイラ州知事1880-84年を務めたことがあった。フランスと米国で農業技術などを学んだフランシスコは、20歳でメキシコに帰ると、1893年、荒れていたサンペドロの土地開発を父から委ねられた。翌1894年には、綿花栽培をはじめた。新たな種子を導入し近代的機械を用いて生産量を増やすことに成功する。労働者のためには、清潔な住居や医療を提供した。地元にも学校も作り、奨学金を出している<sup>35</sup>。フランシスコの招きで、弟のアルフォンソAlfonsoとエミリオEmilioもこの地で農業経営にあたった。フランシスコは、以後8年間で25万ドルを超える資金を獲得し、地域での名声は高まった<sup>36</sup>。資金は、ディアス政権打倒運動に注がれることになる。1911年トレオン攻撃の革命軍指揮官には、エミリオがついた。コアウイラ州側にあたる中下流域にはメキシコ人所有の小規模農園もあった。

ラグナ地方は、ゴム状物質を含む低木グアユーレの集積地、加工地ともなった。グアユーレは自生していて農地開発には邪魔とされていたが、天然ゴム需要が高まる中で有望な資源となる。フランシスコ・マデロは放牧地として入手した土地にたまたまグアユーレが自生していたことから開発に乗り出している<sup>37</sup>。トレオンには加工場として米国ロックフェラー系コンティネンタル・ゴム会社Continental Rubber Co.が進出した。

ラグナ地方全体の労働者数をメーヤースが次のように推定している。ラグナ

34 Meyers, *Forges of Progress*, p. 57. 他のメキシコ人農園主では、トレオンから北東部にゴンサレスCarlos Gonzálezがラ・コンチャLa Concha農園を所有していた。Vargas-Lobsinger, *La Hacienda de La Concha*.

35 学校はフランシスコ・マデロの農園だけに設けられたわけではない。ラビーン、ルハーン、アロセナArocena, ゴンサレス、パーセルPurcell家の農園、トラウアリロ農園でも学校が設けられた。農園内定住労働者用病院もマデロ家、ラビーン家、トラウアリロ農園に設けられていた。Meyers, *Forges of Progress*, pp. 122-123.

36 エバリストは19人の子をもうけ、うち14人が成人まで達した。孫は34人で、フランシスコもその一人である。マデロ一族の団結は強かった。Stanley R. Ross, *Francisco I. Madero, Apostle of Mexican Revolution*, Columbia University Press, 1955, p. 4, pp. 10-13. 以下、フランシスコについては、同上書を参照した。

37 Ross, *Francisco I. Madero*, p. 97.

地方の綿花農園では、農園内に住む常雇労働者が約10万人いたほか、収穫時期には季節労働者が1万人から5万人ラグナ地方に集まってきた。綿摘み時期は真夏ごろから秋の終わりまでの数ヶ月で、多数の摘み手が必要とされた。日給が中央に比べて高かった。綿摘みが終わると、大量の失業者が出た。戻る場合もあったが、日雇いの仕事を探しながら、ラグナに留まるものもいたし、米国テキサスの農園で綿摘みに向かうものもいた。そのほか、グアユーレ関連では、1万1000人、周辺の鉱山業で3万人、都市部に作られた工場では、1万人ほどが従事していた<sup>38</sup>。

トレオン創建：虐殺の舞台となるトレオンはセントラル鉄道の駅として始まった。1883年、それまで農園の一面に過ぎなかった場所に、米国エルパソから建設が進んでいた米資本によるセントラル鉄道が延伸され駅が設けられたのである。南からも鉄道建設が進み、翌1884年にメキシコ市とエルパソは鉄路で結ばれた。1888年には、ラレドLaredoからのインテルナシオナル鉄道がトレオン駅でセントラル鉄道と接続した。トレオン駅は、米国とメキシコ中央部を南北・東西で結ぶ北部交通の要となった。トレオンは、このときまで駅舎とその周辺が開発されたただけだった。

メーヤースによれば、トレオンは米国南西部の鉄道ブーム・タウンと似ている<sup>39</sup>。駅近くの線路沿いに、まずテントやバラックが作られ、その後ホテルやレストラン、酒場が作られるのは自然な流れである。鉄道建設には、実際に建設にあたる労働者だけでなく、米国から高給を取る技術者もやってきた。建設後には鉄道を維持するために関連労働者が必要となる。トレオンには、灌漑設備の建設、綿花生産の拡大に伴って様々な物資が鉄道で運ばれてくる。綿花収穫期には農業労働者も各地から集まってくることになる。関連産業も集まってきた<sup>40</sup>。

38 William K. Meyers, "Second Division of the North: Formation and Fragmentation of the Laguna's Popular Movement, 1910-11," Friedrich Katz, ed., *Riot, Rebellion, and Revolution: Rural Social Conflict in Mexico*, Princeton University Press, 1988, pp. 458-459. 先行研究において中国人移民がラグナ地方の綿花農園で働いていたという記述はみられない。外国人農園管理者の一例では、コックなどとして中国人家事労働者がいた。1910年代以降、綿花栽培の中心地となったメヒカリ Mexicaliでは中国人移民が主な担い手だった。佐藤勤治「アメリカニゼーションと革命：メキシコ北西部メヒカリにおける『メキシカニゼーション』」油井大三郎・遠藤泰生編『浸透するアメリカ・拒まれるアメリカ：世界史の中のアメリカニゼーション』東京大学出版会（2003年）。

39 Meyers, *Forges of Progress*, p. 32, p. 78.

トレオンは計画都市である。1888年1月、線路沿いの土地を手にしたドイツ系商社のエッペン Andrés Eppen がトレオン駅周辺を区画整理し売り出した。セントラル鉄道とインテルナシオナル鉄道が連結されたのはその2ヶ月後の3月のことである<sup>41</sup>。エッペンは、ドイツ系銀行家の家にメキシコ市で生まれた。ドイツで教育を受けたのち、その後、赴任先のラグナ地方で結婚、駅周辺の土地取得に関わっていた。最初の街区計画は、たまたまメキシコ側を訪れていたエッペンの知り合いドイツ系米国人技師ウルフ Federico Wulff が担当した。ウルフはテキサス州サンアントニオ生まれで、エッペンと同様にドイツで専門教育を受けている。共通の出自をもつ外国系同士のつながりは大きい。ウルフは、前述トゥリータスの父である。

地図2は、20世紀初頭のトレオン中心地である。ラモン・コロナ通りまでがウルフによる街区計画図の東端にあたる。南側はインテルナシオナル鉄道の軌道であり、北側はナサス河川域である。ウルフはそれまでテキサスを拠点にしていてメキシコでの事業の経験が乏しかった。ウルフによれば、米国で使っている測量器しか所持していなかった。そのため、メキシコで使われている単位との換算を誤って計算した結果、1区画が通常のメキシコ基準と比べてやや大きくなったという。区画の各辺は84.73メートルであった。各区画は4等分されて販売された。ウルフは、これ以降、本拠地をサンアントニオからトレオンに移して土木建設業に従事した。ウルフはトレオン創設の功労者である<sup>42</sup>。

町は急激に拡大した。街区の売り出しが始まった1888年には、4等分された各区画を足し合わせると約25区画分が売れている。エッペンが土地を手放して地元の大農園主カルロス・ゴンサレスに譲渡する1896年までにさらに約12区画分が

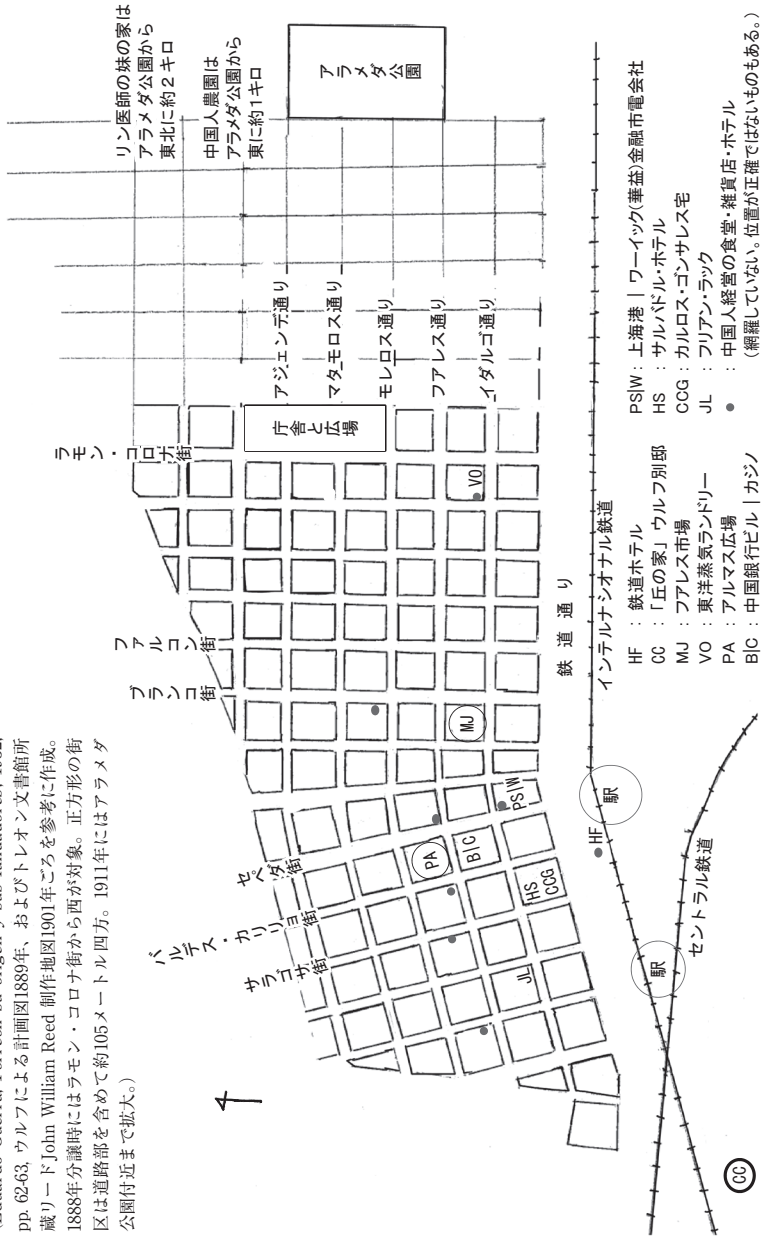
40 1902年ごろのメキシコ・セントラル鉄道の従業員数は、メキシコ人1万7500名、米国人1246名、英帝国黒人373名などで、その他10数人としてごく少数の中国人がいた。ただし、鉄道建設では、1900年に始まった同鉄道タンピコーサンルイスポトシ間の支線建設で、米国南部から黒人1000名、カリブ海黒人2000名の他、1899年には中国人300人が導入された。中国人契約労働者の日給は1ペソで、メキシコ人の賃金は75センターボだった。当時の新聞記事では、各地の中国人鉄道労働者が天然痘やハンセン病などの原因だと書かれている。Delia Salazar Anaya, "Ferrocarriles e inmigración internacional en el norte de México, 1880-1914," R. B. Brown ed., *Introducción e impacto del ferrocarril en el norte de México*, Universidad Autónoma de Ciudad Juárez, 2009, pp. 80-83.

41 Eduardo Guerra, *Torreón: Su origen y sus fundadores*, (*Historia de la Laguna*), 1932.

42 Guerra, *Torreón*, p. 57, p. 330.

地図2 トレオン市街図 20世紀初頭

(Eduardo Guerra, *Torreón su origen y sus fundadores*, 1932, pp. 62-63, ウルプによる計画図1889年、およびトレオン文書館所蔵リードJohn William Reed 制作地図1901年ごろを参考に作成。1888年分譲時にはラモン・コロナ街から西が対象。正方形の街区は道路部を含めて約105メートル四方。1911年にはアラメダ公園付近まで拡大。)



売れた。整備した区画の半数以上がこの時点までに売れている<sup>43</sup>。人口は、1893年約4000人、1900年約14000人、1910年約3万人から4万人と急激に拡大した<sup>44</sup>。1907年には行政上の「市」に昇格した。1907年のある雑誌は、「トレオンは、一日に発着する列車数からみて、現在、メキシコ北部で最も重要な町である。貨物列車を除いて、その数は20を超え、時間帯に関わらず駅には絶えず活気がある」と指摘している<sup>45</sup>。トレオンは、鉄道を中心にした新興都市だった。「当然のことながら、鉄道がなかったら町もなかっただろう」とトゥリータスも述べている<sup>46</sup>。

トレオン駅の近く、「鉄道通り」から南側には、綿花や鋳産物などラグナ地域やその周辺の山地で栽培・採掘される原料を加工・精錬する工場が建設された。工場の多くは外国人所有であった。例外的に、トレオン金属会社 La Compañía Metalúrgica de Torreón (1901年設立)は、地元メキシコ北部資本によるもので、エルネスト・マデロ Ernesto Madero が社長、カルロス・ゴンサレスが副社長だった。理事にはエバリスト・マデロの名もある。周辺の鋳山で産出した錫、鉛、銅の精錬を行った<sup>47</sup>。エルネストはフランシスコの叔父である。

ラグナで必要とされる物資の多くは外国から鉄道で運ばれてきたため、トレオンには外国人の商業関係者も多かった<sup>48</sup>。トレオン最大の外国人コミュニティは米国人で、1500人ほどの規模だったとされている。1910年頃のトレオンは、舗装道路、電灯、路面電車、下水道、電話、映画館を備えたメキシコで一番モダンな町、アメリカナイズされた都市だと言われていた<sup>49</sup>。

ウォン・フォンチュック Wong Foon-Chuck とトレオン：中国人移民は、こうしたコスモポリタンな雰囲気の中かで、新興都市トレオンの拡大と歩調を合わせて成功を納めた。新興都市だったからこそ、アジアからの移民が活躍する余地があった。

43 Guerra, *Torreón*, pp. 60-61, p. 83. 取得者と取得区画の一覧表が掲載されている。

44 Guerra, *Torreón*, p. 89など。

45 “Informes de las industrias laguneras en 1907,” *El Mundo Ilustrado*, 6 de octubre de 1907. ただし、下記資料集の再録を参照した。Gustavo del Castillo, Tomás Martínez, *La Comarca Lagunera; su historia, parte I, Fuentes documentales y estudios*, Cuadernos de La Casa Chata, No. 17, 1979, p. 58.

46 Jamieson, *Tulitas de Torreón*, p. 12.

47 Guerra, *Torreón*, p. 94. Meyers, *Forges of Progress*, p. 74. 溶鋳炉を12備え、1905年までに従業員数は1000人となっていた。

48 Meyers, *Forges of Progress*, p. 97.

49 Meyers, *Forges of Progress*, p. 80.



メキシコにおける中国系住民のほとんどは中国本土からの直接移民である。しかし、米国から転入してくるものもいた。中国人移民がトレオンに集中する上で重要な役割を果たしたウォン・フォンチュック黄寛焯は、米国からコアウィラ州に転入している。ウォンは、米国境により近いモンクロバMonclovaを拠点としていたが、鉄道で繋がるトレオンにも1893年に駅構内にあった鉄道ホテルの営業権を獲得したほか、野菜農園、近代的ランドリーを所有していた。何よりも「中国銀行」創設を主導した人物である。トレオン史として最も評価されているゲラ前掲書では、住民ではないにもかかわらず、トレオン発展の功労者として特別に頁が割かれている。ウォンは、事件当時トレオンにはいなかった。首都の新聞がポルフィリオ・ディアス市〔現ピエドラス・ネグラス〕発としてトレオン虐殺事件の第一報を伝えたのは5月23日であるが、その情報源は「同胞多数殺害」の報をウォンが16日に従兄弟から受けたことだと記事に記されている<sup>50</sup>。

ウォンは、1863年広東省生まれである。12歳のときサンフランシスコに渡り、宣教師学校に学んだ。1881年に一時帰郷するが、翌年米国への再入国が拒否された<sup>51</sup>。この年、排華法制定により中国人移民が禁止されたからである。しかし、ウォンは逃亡に成功しテキサス州に移動した。コアウィラ州と接する国境の町イーグルパスのレストランでコックを皮切りに、ホテル経営にものりだした。1886年にホテルを売却してメキシコに移住する。インテルナシオナル鉄道の建設が進むなか、沿線でのホテル経営の機会を伺いながら東洋雑貨を移動販売し1887年に初めてトレオンを訪れた。このころ、のちにコアウィラ州知事になるミゲル・カルデナスと知り合っている。1889年には、再び帰郷した。1890年、インテルナシオナル鉄道系列のコアウィラ石炭会社が沿線で開発した鉱区(San Felipe)で中国人炭鉱夫400人の監督を務めた。石炭は鉄道機関車の動力でもある。別の鉱区であるが、のちに紹介するように、1907年には同じコアウィラ石炭会社の炭鉱夫として多数の日本人移民が導入されている。中国人鉱夫と日本人鉱夫が、時期と鉱区こそ違え同様の現場で働いていた点も注目したい。

50 “Una terrible matanza de chinos,” *El Imparcial*, 23 de mayo, 1911. 佐藤「『邦人七名殺戮』の風説」40-41頁で、記事全文を引用している。

51 以下、ウォン・フォンチュックの略歴については、Guerra, *Torreón* pp. 330-331, および娘 Hortensia Chuk Vega の以下のメモによる。Lucas Martínez Sánchez, *Monclova en la Revolución: Hechos y personajes, 1910-1920*. Colegio de Investigaciones Históricas del Centro de Coahuila, 2005, p. 63. Archivo General del Estado de Coahuila 上のPDF版を参照した。http://ahc.sfpcoahuila.gob.mx

ウォンは、1892年にメキシコに帰化している。1895年にメキシコ人女性と結婚、コアウィラ州でホテル・農園経営など幅広く事業を行っていた。1901年までにインテルナショナル鉄道沿いに6つ鉄道ホテルを経営していた<sup>52</sup>。1911年7月時点での中国人帰化者名簿には、メキシコ全土で総計319名が記されている。そのうち、1892年以前に帰化した中国人はウォンを含めて4名しかいない<sup>53</sup>。

ウォンは、中国人移民のための学校Yue Maeをモンクロバに設立している<sup>54</sup>。1907年にメキシコにおける「清国人」調査を行なった日本公使館書記官矢田長三郎は、トレオンでウォンに面会したのち、この学校も訪問している<sup>55</sup>。学校では、英語、スペイン語、中国語、歴史、地理、数学、文法、音楽、体育がおしえられていた。大変完備された施設で、生徒たちは洋装断髪で綺麗にしていると報告にある。ウォンは清での革命を望んでいた。矢田は、「革命を成就させるには、先ず教育を盛にして財力を蓄えなければならない。わたしはメキシコにおいて中国有事の際の準備をしている」という趣旨の発言を聞いたと書き留めている。

こうした政治意識を背景に、ウォンは1906年メキシコを訪れた康有為に協力してトレオンに華墨銀行Compañía Bancaria Chino y Méxicoの創設に関係した。通常、「中国銀行Banco Chino」と呼ばれる銀行である。康有為は、当時、在外中国人からの支援を求めて外遊していた。ウォンなどを頼って米国経由でトレオンを訪れた際、トレオンの土地投機で資金を得たことをきっかけに、保皇会の認可の下に創設したのがこの銀行であった。社長は康有為である。

52 中国人移民によるホテル経営は珍しくない。ジョン・リードはチワワ州ヒメネスにあるチャーリー・チー Charlie Chee が経営するニューヨークホテルを最頂にしていた。

53 “Noticia de los súbditos chinos a quienes se ha otorgado carta de naturalización mexicana,” y “Lista de los súbditos chinos nacionalizados mexicanos y residentes en Torreón.” *Chinos en Torreón, Su asesinato*, Exp. 13-2-34, legajo I, (Archivo Histórico Genaro Estrada, Secretaría de Relaciones Exteriores, México). 帰化者のうちトレオン在住者は43名であった。

54 首都で行われたメキシコ独立100年祭の行事で、この学校の生徒が音楽の演奏を披露した。México, Secretaría de Gobernación, *Crónica oficial de las fiestas del primer centenario de la Independencia*, Museo Nacional, 1911, p. 179. (archive.orgで参照)

55 メキシコ公使館書記官矢田長三郎報告摘要「墨国ニ於ケル清国人」『墨西哥国ニ於ケル本邦移民関係雑件』(3・8・2・16)『帝国官吏出張雑件復命書ノ部別冊 在外公館 在墨公使館』第2巻 明治40年(1907年)墨国移民状況視察報告(第2)外務省外交史料館(国立公文書館アジア資料センター PDF書類を参照)。ウォンについて「巧ミニ英語ヲ操リ軀幹短小ナルモ精悍ノ氣眉宇ニ溢レ言論ノ際俊爽風ノ人ヲ襲ウモノアリ」としている。

トレオン「保皇会」（スペイン語では「中華帝国改革会 Sociedad Reformista Imperio Chino」とされた）は、1903年メキシコ北部在住中国人によって設立され、「中国銀行ビル」二階に会議室、図書室、書記事務室を備える事務所を構えていた<sup>56</sup>。ウォンは、被害届によれば、1911年時点で保皇会トレオン支部の代表であった。矢田の観測ではメキシコ在住中国人の「三分の一」は革命派で、秘密結社を組織しているとする。「三分の一」の根拠は記されていないが、銀行の当初の繁栄から判断すると、康有為を支持する中国人移民は確かに多かったろう。

### 中国人の生活の場と虐殺の場

以下では、事件当日虐殺現場周辺に居合わせ、メキシコ政府調査団に手記を提出した中国系移民 W. J. リン Lim 医師の手記、中国人生存者への聞き取り記録、トレオン在住外国人の記録を軸に事件の推移を追いながら、犠牲者名簿をもとに生活の場を地図上で確認する<sup>57</sup>。中国人移民はトレオン住民の近くにおいて、主にサービスを提供していたことがわかる。

リン（日本公使館の外交文書では漢字「林」が当てられている）医師は、1899年にメキシコ国籍を取得している<sup>58</sup>。虐殺を免れた中国人移民への支援や調査過程で中国語通訳をしていることから、中国語が堪能だとわかる。さらに、米国政府に提出された英文依頼文などから、英語も得意だと推定できる<sup>59</sup>。先行研究によれば、米国カリフォルニアの大学で医師資格を得たのち、1895年、妹とともにメキシコに移住した<sup>60</sup>。ウォン同様米国からの転入者であるが、詳細は不明である。

事件直後から虐殺の原因や責任所在の究明のために聞き取りが行われた。清国は米国政府に調査協力を依頼している。米国は積極的に依頼に応じた。米清合同調査団のほか、メキシコ側では革命軍とデラバラ León de la Barra 暫定政府（マデロの大統領就任は11月である）が現地でそれぞれ調査した。どの調査

56 被害届は、*Chinos en Torreón*, legajo IV, 所収。

57 この小論で引用するリン医師の証言は全て以下による。J. W. Lim, “Declaración del Doctor J. W. Lim,” *Chinos en Torreón*, legajo II.

58 注53参照のこと。

59 J. W. Lim, “Letter to the President of United States, William H. Taft,” 321.93/10 (RG 59, General Records of the Dept. of State, National Archives, U.S.).

60 Herbert, *La casa*, pp. 156-158.

報告書でも、中国人移民からマデロ派革命軍への発砲の真偽が検討されている。革命軍側の調書に、中国人が革命軍に発砲したという証言があったからである。中国人の殺害に幾分かでも正当性があったかどうかは、外交上の要点である。1911年は干支で「辛亥」に当たることにも注意したい。辛亥革命は同年11月に起こっている。調査の結果、総計303名の犠牲者名簿（居住地、職業、出身地欄がある）が作成された<sup>61</sup>。

犠牲者数の確定は、賠償金請求額算定のために必要だった。メキシコ側は責任を認め、メキシコ政府は賠償金を支払う姿勢をみせた。日本同様、「文明国」を目指していたメキシコは対外関係をことさら重視していたということでもある。中国人虐殺は、在メキシコ外国人虐殺という点で、清以外の諸外国にとっても見逃すことのできない出来事だった。メキシコ・清国間で、賠償金は310万ペソ、1912年7月までに支払うと合意された。しかし、メキシコ議会上院で批准されず、最終的にも実行されなかった。

虐殺事件直後にトレオン駅を通過した日本人がいる。山入端<sup>ヤマノハ</sup>萬栄（1888年沖繩生まれ）である。山入端は、1907年東洋移民会社が募集したメキシコ行き炭鉱契約移民として、コアウィラ州ラス・エスペランサス Las Esperanzas 炭鉱で働いていた。上野英信によるメキシコでの調査によれば、山入端が乗船した第二琴平丸からは、ラス・エスペランサス炭鉱で働くことになっていた1000人以上がサリナ・クルス Salina Cruz 港で下船したが、炭鉱に到着するまでに8割ほどは逃亡した。ラス・エスペランサス炭鉱の労働条件は劣悪で、炭鉱事故や病気でなくなるものも多かった。多くは契約満期の3年を待たずに逃亡した。米国へ向かうものが多数をしめた。船賃などは前借りであったため、出身地の保証人が取り立てにあうことになった<sup>62</sup>。

虐殺事件の4、5日後のことであるが、山入端は、契約移民期間3年を終えて、米国入国を目的にエルパソを目指してインテルナシオナル鉄道からセントラル鉄道へ乗り換えるところだった。上野英信が再録した山入端の手記には、「支那人殺サレタ場所」である「支那人街」を「見物ニ行ツタ」と記されている<sup>63</sup>。

61 犠牲者名簿は、報告書類とともに *Chinos en Torreón*, legajo II にファイルされている。

62 上野英信『眉屋私記』潮出版社（1984年）。1901年から移民が禁止される1907年までに日本からメキシコへ渡った移民は、1万人に上っている。ラスエスペランサスには中国人移民も送られた。また、中国人経営の食堂などもあった。

63 上野『眉屋私記』、223-224頁。引用は、同書に再録された山入端の手記「在外五十有余年ノ後ヲ顧ミテ」から。同文書は、佐藤「『邦人七名殺戮』の風説」で紹介した。

トレオン駅近くの中心市街にアルマス広場がある（地図2：PA）。メキシコの通常の都市の場合、中央広場に面する四方の一等地にはカトリック教会や政庁が置かれるのが普通であるが、トレオンの場合両方とも欠けている<sup>64</sup>。その代わりに、旧「中国銀行ビル」（1907年建設：BC）、旧カジノ（1910年建設：C）が姿を残している。以下に見るように、「中国銀行ビル」がある街区周辺には中国人移民関係の建物が他にもあった。山入端が訪れた「支那人街」とは、おそらくそこだったろう。

事件は日本公使館に衝撃をもたらした。のちに誤りだと判明するが、日本人犠牲者がいるとの風説がもたらされていたからである。臨時代理公使堀口九萬一は、この事件に際して、トレオン中国人移民の繁栄ぶりを早速本国に報告している<sup>65</sup>。

**野菜農園：**マデロ派革命軍によるトレオン攻撃が始まった5月13日（土曜日）午前11時から、翌日昼まで、リン医師は、赤十字会員として、アルマス広場付近で、けが人を処置している。2日間の交戦で双方の軍に犠牲者が出た。戦闘は町の中心部に及んでいる。このとき、トレオン東側郊外にある中国人野菜農園ではマデロ派軍がすでに展開していた。

既に述べたように、現在「カランサの森公園」があるあたりには、中国人移民による野菜農園が広がっていた。『トゥリータスのトレオン』にその言及がある。ウルフの娘トゥリータスは少女時代から新婚時代までをトレオンで過ごした。同書には1911年前後のトレオンでの生活が生き生きと描かれている。中国人移民に対する共感とメキシコ人の中国人移民への反感が観察されている。

当時トレオンには町の一方の端に大きな公園アラメダができていた。…その公園の向こうには、広大な中国人農園があって、そこでは人数を増やしていた東洋人たちがすばらしい野菜や果物を育てていた。儉約せずあまり働かないメキシコ人のなかには、そのことを嫌っているものもいた<sup>66</sup>。

64 庁舎は初めアルマス広場に面して計画されたが、事件当時、新たな庁舎と広場が10ブロックほど東に設けられていた。地図2参照のこと。

65 同文書は、佐藤「『邦人七名殺戮』の風説」で紹介した。堀口九萬一は、詩人堀口大學の父である。堀口大學は、慶應大学を中退、父の赴任先メキシコ市に1911年末から身を寄せていた。この事件の半年後のことである。堀口九萬一は、1913年マデロ大統領暗殺時に夫人および家族を日本公使館で保護したことで知られている。「悲劇の十日間」といわれたこのクーデタに大學も居合わせた。堀口九萬一に関する伝記がある。柏倉康夫『敗れし國の秋の果て：評伝堀口九萬一』左右社（2008年）。

66 Jamieson, *Tulitas of Torreón*, p. 95.

リン医師も野菜農園を所有していたため、事件の数日後に状況を見に行っている。手記には、「筆舌に尽くしがたい苦痛を抱えた同胞の真の嘆きがあった」とのみ記され、具体的状況はわからない。フアレス市場の中国人移民が営む野菜売店も略奪された（地図2：MJ）。翌月6月6日、トレオン在住米国領事館員カロザーズ Carothers は、トレオンを訪れたウォンらとともに、ウォンを通訳にして農園の生存者から聞き取りをしている。

（リン医師の農園では）8人が作業に戻っていた。彼らが言うには、13日土曜日朝8時から9時にかけてマデロ派の一团がやってきて、金を出すよう要求した。持ってないと言うと、サーベルで背中を打たれたが、死者は出なかった。月曜朝はやく、マデロ派の一团がきて金を要求した。拒絶すると、3名が殺された。それから、残りの中国人が集められて、トレオンまでぬかるんだ道を強制的に走らせられた。滑って転んだ人がいると、銃撃され馬でふみつけられた。街に向かった20人のうち7名が殺された。

リン医師が所有するもう一つの農園では、18名全員が殺害された。

ウォン所有の農園では、13日にマデロ派がやってきたと生存者のひとりが証言している。この農園では、38名いた働き手のうち33人が殺された。

中国人たちは（13日から）2日間に渡ってマデロ派にこき使われ料理作りを強制させられたが、15日になると、マデロ派は中国人をウサギのように走り回らせて、銃で狙撃したが、何か理由があったわけではない<sup>67</sup>。

この調査では、上記以外の4農場で犠牲者数計42名が数え上げられている。上記を加えると野菜農園関係の中国人犠牲者数は100名以上に上った。

革命軍は、当時トレオン市郊外にあった中国人野菜農園を13日には占拠していた。以上の証言から野菜農園で中国人大量虐殺が行われるのは、15日のことだとわかる。15日未明、アルマス広場に陣を構えていた625人の連邦軍は、革

---

67 農園の中国人からの聞き取り2件は以下から。“Report of investigation of Chinese Massacre that G. C. Carothers, American Consular Agent, Torreon, Coahuila, Mexico, made June 7,” 132.93/7 (RG59, NA., U.S.).

命軍に知られることなく、雨と夜陰に紛れて突然撤退した<sup>68</sup>。15日早朝革命軍がトレオン市内へ抵抗を受けず進軍したとき、革命軍による中国人移民殺戮が郊外を含めて始まったのである。殺戮は、15日明け方から殺害略奪禁止命令がエミリオ・マデロから出される15日昼までの間に集中した。

アルマス広場周辺：市内の様子に戻ろう。15日未明、連邦軍の拠点であったアルマス広場から連邦軍の姿は突然消えた。リン医師によれば、アルマス広場がマデロ派に占拠されたのは朝6時である。彼は、別の医師の診療所で、「午前11時半まで病人とけが人の診療にあたった」。この診療所の位置は明確ではないが、「フリアン・ラック Julian Lack 氏の店（地図2：JL）のあたりで反乱者の一団が空に向けて銃弾を撃ちながら氣勢を上げているのを見た。同じ一団は、ラックの店から1ブロックのところにあるフランス靴屋でも同じ騒ぎをして、ファレス通りを進んで、それきり見えなくなった」と記述していることから、広場近くにいたと推測できる。

それから20分後、正午前のことであるが、リン医師は、中国人商店への略奪を知ることになる。「民衆とマデロ派兵士多数が、衣料品と食料品をたくさん抱えて、私がいいたところを歩いていくのを見た。私は、ただちに、民衆のひとりに、どこから服を取ってきたのかと尋ねると、中国人商店からのものをマデロ派の人がくれたのだと答えた」。

革命軍によるトレオン攻撃に際して略奪が起こることは予想されたことだった。中国人移民たちは、略奪行為に抵抗しないと取り決めていたほどである<sup>69</sup>。『トゥリータスのトレオン』によれば、町に連邦軍兵士が増大すると、4月時点で欧米系外国人はほとんどが米国に向けて脱出を開始した。コンティネンタル・ゴム会社は従業員を全員町から退去させた。トゥリータス自身も4月21日にサンアントニオに出発したが、母親は5月11日朝まで残っていた。母親が、市街を一望できる家ウルフ別邸（地図2：CC）から荷造りをしながら見た光景は、略奪を待ちわびる民衆の姿だった。

68 Wilfley and Bassett, (prepared by), *Memorandum on the law and the facts in the matter of the claim of China against Mexico for losses of life and property suffered by Chinese subjects at Torreon on May 13, 14 and 15, 1911*, p. 5.  
<https://www.loc.gov/item/ltf91010543/>などで閲覧可。

69 無抵抗を呼びかける文書が中国語で配られたとされている。*Chinos en Torreón*, legajo II にスペイン語訳同文書があるが、中国語での文書はない。

連邦軍の応援部隊がトレオンに到着していたが、その時には、ゴメス・パラシオとレルドが陥落していて、トレオンへの攻撃が差し迫っていた。ウルフ別邸の窓からは、大勢の人がただ待っているのが双眼鏡で見えた。この人たちは、兵士ではない市民で、遠くはサカテカスから、トレオンが陥落したら略奪する目的でやって来ていた<sup>70</sup>。

服や食べ物だけが奪われたわけではなかった。窓枠、ソファー、椅子、ミシン、蓄音機、ピアノといった大きなものも運びだされた。トレオンの略奪品はその後何ヶ月も周辺の町で売られていた<sup>71</sup>。略奪対象は、中国人の商店だけではない。トゥリータスの夫ビリー医師の手記（カナダの父にあてた手紙）では、米国人の商店や地所、アラブ人商店、スペイン人商店も被害にあったとし、ディアス派で元トレオン市長の綿花農園主カルロス・ゴンサレスの自宅は略奪にあったのち、その豪華な寝室とパーラーは反乱軍の馬小屋として使われた（地図2：CCG）。ビリーは、15日早朝におけるカジノの略奪にも言及している。中国人殺害の様子が記載されている部分も含め以下引用する。

暴徒が中国銀行ビルに侵入し、その3階で到着したばかりの中国人をたくさん見つけた。暴徒は中国人たちを窓から通りに投げ出すと、下にいた仲間が中国人を始末した。

小さな子どもが壁の前に立たされて撃たれた。「殺さないで」と叫んでいた。中国人女性たちも同じ目にあった。騎兵たちが馬で町外れに行き、中国人を広場まで髪の毛でひきずってきて、処刑した。カジノに避難していた中国人もいた。25万ペソの立派なクラブである。暴徒が押し入って、彼らを殺し終わると、略奪し、完全な廃墟にした。素晴らしい重厚なシルクのフラシ天のカーテンを鞍の覆いに使っていた男をみたことがある<sup>72</sup>。

---

70 Jamieson, *Tulitas of Torreón*, pp. 115-117. この家は、現在「丘の家 La Casa del Cerro」と呼ばれ、博物館として公開されている。

71 “Salvador Benavides a Madero, 8 de noviembre, 1911,” *Revolución y Régimen Maderista. II*, (*Documentos Históricos de la Revolución Mexicana*), Editorial Jus, 1965, p. 257.

72 Jamieson, *Tulitas of Torreón*, p. 119.



略奪対象が広範囲だったのに対して、殺戮されたのは中国人だった。中国人経営の商店や食堂、ホテルでは、従業員の多くが殺害された<sup>73</sup>。

リン医師は、妹の夫から中国人が殺された目撃談を聞いている。殺害の瞬間を目撃したとする中国人の証言はこれ以外ない。「彼（妹の夫）らがいた家からサルバドル・ホテル（地図2：HS）の方に10人が引っ張り出され、そのうち7人が殺された。エミリオ・マデロ殿がいるそのホテルにつかないうちに、後方から彼らは撃たれたのである」。

トレオン市街地で犠牲者が最も多く出たのは、「中国銀行ビル」周辺の地区であった。リン医師は、同僚の情報に従って、「中国銀行の前のアルマス広場の角のところに」行くと、「たくさんの死体が、歩道や通りに散らばっている」のを見ることになる。リン医師は、赤十字の医師とわかる服装をしていたにも関わらず、この直後に、顔を見た兵士たちから銃を向けられ「殺すぞ」と脅された。多くの人が取り囲んで守ってくれたと記している。リン医師は、この直後、反乱軍の命令によって隣町ゴメス・パラシオに退避させられた。

午前中の同じ場所での経験を英国副領事カミンズH. A. Cunard Cumminsは、次のように証言している。

町の通りに着くと、広場の前、今はラグナ銀行になっている旧中国銀行の外のところで、私は、中国人9名の死体をみた。そのうち2人は手足が切断されていた。道には、そのとき通りを埋めていた馬によって踏みつけられて泥まみれとなった別の2人の中国人の死体があった。（中略）ドアの上に漢字が書かれている小さな建物の前では、大変興奮した集団が押し入ろうとしているのをみた。ダイナマイトをくれとの声があり、興奮状態だった。そのとき、完璧な統制のもと右手にピストルを掲げて進むマデロ派の行列が通りかかった。彼らは、数分立ち止まってその場面を見て、それから静かに行進を続けた。マデロ派兵士と無知な住民がなんとかこの建物に入ろうとしていた。二、三度、

73 本文で言及したもの以外について犠牲者の主な居住地を以下に列記する。死者数は名簿から算出した。雑貨店：Wing Hing Lung 2名、Pabellón Mexicano 4名、食堂：Chon Lee 9名、Puerto de Ho Nam 5名、ホテル：「国際鉄道ホテル」（従業員7名。客3名）。職種不明Yee Hop 19名。職業欄に「到着したばかり」とされている犠牲者数は48名（国際鉄道ホテルの客を含む）。

20人から30人の騎乗マデロ派兵士が、前方に中国人を歩かせて、連行するのを私は見た。私の意見では、中国臣民虐殺に参加したのはマデロ派兵士の2割未満だったと思う。マデロ派兵士のなかには、抑制が効かず、自分自身が何をしているのかわからなくなったものがいたと思う<sup>74</sup>。

旧「中国銀行ビル」では、10名が殺害されている。当時、ビル1階には、ラグナ銀行やアラブ人経営の商店があり、すべて略奪された。2階には、「中華帝国改革会 Sociedad Reformista Imperio Chino」の事務所があった。すでに説明したように、1903年に北部メキシコの中国人移民で創設された保皇会の支部である。被害調査書類によれば、当時の会長はウォンであった。ビルの2階に7室、3階に9室の居室があり、居住中の中国人が犠牲となった。トレオン中国商業協会 Asociación Comercial China de Torreón（会員数550名）が入るビルも近くにあり、そこでも犠牲者が記録されている。

「中国銀行ビル」のある区画から南東に1区画離れたイダルゴ通りとセペダ街が交差する南東角にあった雑貨店「上海港 El Puerto de Shanghai」（地図2：PS）では、17名が殺害された。「上海港」がある建物には、「ワーイック（華益）貯蓄路面電車会社 Compañía Bancaria y de Tranvía Wah Yick」も置かれていた（地図2：WY）。いわゆる中国銀行のことで、経営に行き詰まり、事件の数ヶ月前に「中国銀行ビル」からここに拠点を移していた。地上階に大広間と銀行の事務室があり、上階はアパートになっていた。ここでも死者がでている。

東洋蒸気ランドリー：アルマス広場から7ブロックほど東に行くと、ウォンが経営する東洋蒸気ランドリー Lavandería de Vapor Oriente（地図2：VO）があった。ここでの状況は、詳細に知られている。殺害されたのは、中国人従業員20数名のうち4名で、残りの中国人は、ランドリーと隣接するベッド製造工場 La Vizcaína に逃れ、その主人カデナ José de Cadena に匿われた。

カデナは、15日朝8時ころ、自分の工場に中国人がいると知らせを受けた。工場に行くと、ランドリーとの境の壁を超えてさらに中国人が無断で逃げ込

---

74 Antonio Ramos Pedrueza, “Informe (sin título), 13 de septiembre de 1911,” に添付された証言記録による。Chinos en Torreón, legajo II. ラモス・ペドロエサは、デラバラ暫定政権が任命した調査官である。

むところだった。比較的スペイン語がわかるルイスと言う名のランドリー従業員から、すでに何人かが殺されていて、自分も民衆や兵士の攻撃を受けるのではないかと恐れているとの説明を受けている。「ランドリーの外では、従業員、経営者出てこいと怒りの叫び声をあげている人たちがいた。状況を考慮すると、自分や家族や仕事を大きな危険にさらすことになっても、涙ながらに懇願する人たちを家に匿うことに躊躇しなかった」と証言している。

このとき、ランドリーの様子を近くから見ていた外国人がいた。近くに住むグラハム Samuel Graham である。月曜日朝、自分の使用人の家に手押し車やヤカンなどのランドリーからの略奪品があることを確認している。その妻は、「泣いていて、ランドリーで中国人が2人殺されたと教えてくれた。私は何人かの人になぜ中国人を殺しているのかと尋ねた。その答えは『嫌いだから』だった」。グラハムは、反中国人感情がこんなにあるとは知らなかったと述べている<sup>75</sup>。ランドリーの近代的備品は完全に破壊略奪された。ペリーの手記に次の記述がある。「このまえの木曜日と金曜日、下層階級の人たちが中国ランドリーでバイレ（踊り）を催した。このまえの月曜日、彼らがそこにいた全員を虐殺した場所であった」<sup>76</sup>。

虐殺を免れた中国人：リン医師は、事件から数日後に、妹一家を訪ねている<sup>77</sup>。リン医師の所有地で、事件当時、妹一家が暮らしていた。革命勃発の数年前に建てられた二階建ての立派な木造一軒家で、現在でも優雅な外観が残され、私設の「革命博物館」になっている。

リンの妹は中国人と結婚し、子供が3人いた。「私は妹と3人の子供（一人は14歳の女の子、ほかは小さい）が住む別荘に向かった。しかし、不在だった。私は彼女を探したが絶望した。というのも、菜園と同様に、家具、家畜、その他財産などわたしの別荘は完全に略奪され、破壊されていたからである」。諦めかけたが、妹は3人の子とともにハンプトンという名のアメリカ人の家に避難していたことがわかる。妹は、「5月15日の朝、50人くらいのマデロ派一団がやってきて、恐ろしいやり方で愚弄し、家族もろとも殺そうとした。鉄面皮

75 以上、カデナの証言は、革命軍調査団（マルティネス Macrino J. Martínez）の聞き取り。グラハムの証言は、ラモス・ペドルエサによる聞き取り。*Chinos en Torreón*, legajo II.

76 Jamieson, *Tulitas de Torreón*, p. 121. エルベルは、水曜日だとしている。Herbert, *La Casa*, pp. 216-217.

77 地図2の範囲外にある。アラメダ公園と中国人農園の間でアラメダ公園から北東に2キロほどに位置する。

にも、長女に銃を向けて結婚するように言って強要したほどである。子供とともに別荘を出た後、破壊と窃盗が始まった」とリン医師に伝えている。「愚弄」の具体的内容は証言にはない。リン医師の妹は、唯一のトレオン在住中国人女性だと言われている。

前出カロザーズ報告書には、中国人を匿ったトレオン住民の名とそれぞれが匿った人数（総計127名）が挙げられている。同報告書によれば、ハンプトンは11名、カデナはランドリーの従業員22名を匿っている<sup>78</sup>。このほか、中国人経営のEastern Restaurant（「遠東旅館」だと思われる）では70名が住民の機転によって身を隠すことに成功したと記載されている。虐殺を免れた中国人たち200人ほどは、「保護」のためとして革命軍に連行され収容された。ただし収容先でも所持品の略奪がおこなわれた。リン医師は、収容先にパンやコーヒー、水を差し入れた商人エルナンデス氏から聞いたこととして、収容先での略奪について手記に記している。「夜の12時ごろに、何人ものマデロ派兵士が慎重に牢屋の中で捜索して何人かを激しく殴ったのち、体に身につけていたお金を全て奪い、その金はかなりの額になった」。

事件後、トレオン中国人移民の状況はどうだったか簡単に記しておきたい。これだけ多くの犠牲者や被害があったにもかかわらず、中国人はトレオンを見限ってはいない。すでに紹介した6月6日野菜農園調査（カロザーズ報告書）では、農園で作業する中国人が調査に答えている。リン医師の農園では、調査時8名が仕事に戻っていた<sup>79</sup>。1913年版『国際中国人ビジネス名簿』（英語および漢字で企業家名と職種が各国の都市ごとに記載されている）は、トレオンの中国人ビジネスとして、雑貨店9（うち一つはLaundryと記載）、餐館1（restaurantと記載）、旅館（restaurantと記載）2、そのほか「国民党会所」、「北京公司布疋（Fancy Dry Goodsと記載）」を挙げている<sup>80</sup>。この『名簿』には、中国銀行やウォンの関係していたホテルやランドリーの記載はない。トレオンにおける中国人の商業活動は事件を契機に縮小したと考えられる。しかし、上記のように中国人の商業活動は継続していた。中国人移民に対する殺害を含めた同規模の暴力・略奪行為は、トレオンにおいて継続しなかったということ

78 Carothers, "Report," p. 2. 321.93/7 (RG59, NA., U.S.).

79 Carothers, "Report," p. 4.

80 Wong Kin, *International Chinese Business Directory of the world: for the year 1913*, pp. 1572-1573. International Chinese Business Directory Co., 1913. (archive.orgで参照)。

である。事件から2年後の1913年、トレオン在住の兄弟を頼って中国本土から新たに移民した中国人家族も知られている<sup>81</sup>。

### 革命と民衆暴力：おわりにかえて

本稿「はじめに：110年目の謝罪行事」において、中国系メキシコ人の苦難に満ちた家族史を二つ紹介した。規模や迫害のあり様は違うが、事件以降も中国人移民を標的にして迫害、殺戮と破壊略奪など暴力行為は続いた。メキシコにおける中国人移民排斥運動は、1920年代以降、制度化され活発化していく<sup>82</sup>。のちに展開する反中国人運動との関連から本稿の最後に課題を示しておきたい。

これまで紹介した諸史料から分かるように、トレオンの中国人は、野菜栽培農園、ランドリー、食堂、雑貨店などで働いている。トレオン住民の間近で生活する見える存在だった。一方、トレオン事件において店舗などを略奪した人々は地元および周辺住民だった。また、殺戮実行者は主にラグナ地方で集められた革命軍兵士であった。革命軍の本来の目的はディアス政権打倒である。しかし、敵が突如いなくなった1911年5月15日のトレオンでは、身近な少数派移民に対する地域住民による暴力行使が革命の名のもとにおこなわれたのである。

ラグナ地方のマデロ派革命軍兵士について確認しておこう。革命軍は、前年の11月以降に組織された。トレオン以外のラグナ地方を掌握するのは容易であった。兵士としての訓練はほぼできていなかったはずである。当時、ラグナ地方では、革命の騒乱による鉄道交通の遮断で物資が不足し、工場も閉鎖されていた。人手を必要とする綿花の収穫時期は終わっていた<sup>83</sup>。革命軍への参加は、貧しい者にとっては生活の糧を稼ぐことでもあった。また、マデロの指揮する反ディアス政権運動にはラグナ地方の農園主も加わっていて、農園の労働者も革命軍に加わっていた。

81 広東省生まれのフイJuyは1913年5月メキシコに到着、すでにトレオンに在住していた兄弟と共にファレス通りとブランコ街の角で雑貨店La Vencedoraを開店した。Ma. Antonia Juy de Valdéz, “Volviendo a las Raíces”, Exp. 055. Fondo Familia Juy. Archivo Histórico Juan Agustín Espinoza, Universidad Iberoamericana, Torreón.

82 概略は次を参照のこと。佐藤勘治『「メスティーソ化」：1932年メキシコ反中国人移民運動イラスト』エスニック・マイノリティ研究会編『多様性を読み解くために』東京外国語大学海外事情研究所、電子出版（2020年）。

[http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/99678/1/igas\\_ems\\_07.pdf](http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/99678/1/igas_ems_07.pdf)

83 ラグナ地方における革命軍の形成と拡大について詳しくは、Meyers, *Forge of Progress*, pp. 229-243. および、Meyers, “Second Division.”

カッツは、ラグナ地方で革命軍に加わったのは中央部から流入してきた「近代的ペオン」だったと述べている。ペオン *peón* とは、ここでは農園労働者のことである。やや長いが以下引用しておきたい。

ラグナ地域の綿花農園ではメキシコ—高い農業賃金が払われていた。そのうえ、そこでは、債務奴隷のような強制労働形態がすべて実質的に消滅していた。(中略) 農園主 *hacendado* たちは、自分の店では近隣の店舗よりも安い値段を売るようにして、不足する労働力を引きつけるインセンティブとしてラヤ *raya* 店舗 (農園内の掛売り店) を使ったのである。それは、利益増大のためでも農園 *hacienda* にペオンを縛りつけるためでもなかった。

こうした利点があるにもかかわらず、前述の移民が定着したラグナ地域は、1910年から1920年までの10年間、革命軍のほぼ尽きることのない供給地となった。彼らの主な目的は地域の土地所有者に敵対することではなかった。多くの移民にとって、中央部の出身地の状況に比べて肯定的だったからである。(中略)

実際、1910年から1920年の革命においては、農園内定住ペオンの多くが農園主に対してではなく農園主とともに反乱した。ヨーロッパ中世の領主のように、ソノラやラグナの地主たちは待遇がいいペオンを率いて戦いに赴いたのである<sup>84</sup>。

革命軍は、メキシコ革命初期段階における対抗図式に中国人移民を位置付け、虐殺を正当化した。ディアス政権は中国人を優遇していたため、連邦軍から協力を求められた中国人移民は連邦軍に味方し革命軍を攻撃する中で事件が生じたとする解釈である。革命軍側のマルティネス調書では、中国人から発砲があったからだと何人かが証言している。この場合、連邦軍トレオン放棄の際に武器弾薬が中国人に渡されたと語られる。殺害は反撃であり、事件とされる出来事の本質は革命に伴う戦闘であったと主張した。

革命軍によるトレオン掌握は、連邦軍との2日間ほどの戦闘が続いた後であ

---

84 Friedrich Katz, *De Díaz a Madero. Orígenes y estallido de la Revolución Mexicana*, Era, 2004, pp. 30-31. 大農園主ラビーン家の末子パプロは、ドゥランゴ州側でマデロ派を率いた。Meyers, *Forge of Progress*, p. 238.

る。攻撃を覚悟しながらトレオン市街に入城した革命軍は、なんの攻撃もうけないことに驚いた。すでに述べたように、連邦軍は雨中夜陰にまみれて夜明け前には撤退していたし、一方、革命軍側はそれを知らずにいたからである。疑心暗鬼の中で、革命軍による中国人殺戮と民衆も加わって商店などに対する破壊略奪が生じることになる。

部隊長の一人は、攻撃が実際にあったので中国人に対する攻撃命令を出したと証言している。「中国銀行」ビルの前に診療所があったある医師は、「中国銀行ビル」のドアを革命軍兵士が開けようとしたら、上階の中国人から銃撃を浴びたと証言している<sup>85</sup>。後者の証言では、中国人は略奪阻止のため発砲したことになる。さらに、革命軍側の調査では、中国人は、連邦軍の指示に従って酒や飲料水に毒を入れ、それを飲んだ兵士が毒にやられたという証言もあった<sup>86</sup>。こうした解釈に批判的なラモス・ペドルエサ報告でも次の記述がある。「トレオンの何人もの著名人やご婦人方さえもが、マデロ派の人たちは毒を盛られることを恐れていて、くれた人が飲まないうちは自ら飲まなかったと、わたしに証言した。民衆の想像力では、中国人の野菜、水、アルコール飲料さえも、毒が入れられているという噂が広がった」。

また、ラモス・ペドルエサは、中国人からの銃撃についてトレオン住民のほとんどが信じていると報告書で述べている。「中国人が発砲したというのがトレオンの人たちの一般的な見方であることは、疑いのない事実である」<sup>87</sup>。この見方は、現代でも払拭されていない<sup>88</sup>。再版されたゲラ『トレオンの歴史』では、「中国人の何人かが革命軍に発砲したという、おそらく確かな解釈に基づいて、アジア人の殺害が始まった。多くが中国銀行に避難し、そこが惨劇の中心になった。亡くなった中国人の数は全部で303名だった」としている<sup>89</sup>。「おそらく」と断り書きがあるものの、虐殺が中国人の発砲をきっかけに始まったとしている。

85 マルティネス判事による聞き取り。 *Chino en Torreón*, legajo II.

86 Miguel Robledo と Rafael Garza (商人) の証言。 *Chino en Torreón*, legajo II.

87 Ramos Pedrueza, "Informe," p. 11. ラモス・ペドルエサ自身は、この噂は、群集心理によるものだとしている。

88 Herbert, *La Casa*, が現代トレオン市民の証言を集めている。

89 Eduardo Guerra, *Historia de Torreón: su origen y sus fundadores*, Secretaría de Cultura de Coahuila, p. 221. 同書の初版は1932年であるが、2012年にコアウィラ州政府により再版された。書名が異なるが、Guerra, *Torreón* と同じ。この注に限り、2012年版で頁数を示した。

自衛のための発砲があったとしてもおかしくはないだろう。しかし、ディアス政権維持のために連邦軍側に立って戦ったという考えに合理性はない。ラモス・ペドルエサ報告では発砲そのものさえ根拠づけるものはないと結論している。

参考として、メキシコ革命開始時期における中国人移民の政治的立場に関する当時のメキシコ民衆の認識を知る手がかりを紹介したい。革命軍が連邦軍を襲撃しようとしているソノラ州の町で、野菜売りの中国人が連邦軍から誰何を受け、思わず「マレロ Malelo」と言ってしまう銃殺されたという小話である。この小話は、中国人移民は「人種的に嘘つき」で、連邦軍からの誰何だと分かっていたのに、反対のことを言ってしまったのだと語られる<sup>90</sup>。誰何されたときどう応答すべきかわからず「おまえ、最初に言う Tú liciendo plimelo」と述べたとバカにする話も伝わっている<sup>91</sup>。これらの小話からは、商売に夢中で、対立する勢力のどちらにつくか中国人移民は判断できないとメキシコ民衆は考えていたと推測できる。連邦軍が主張した中国人移民像とは大きく異なっている。

一方、マデロ派革命軍の側には、反中国人移民排斥を唱えるメキシコ自由党の支持者が加わっていた。追放され米國を拠点としていたメキシコ自由党は、1906年に政策綱領を発表している。そこには、米國労働運動の影響を色濃く受けた第16条項「中国人移民の禁止」が含まれていて、理由が次のように説明されている。「中国人移民禁止は、なによりも、それ以外の国籍労働者とりわけメキシコ人労働者を守る方策のひとつである。中国人は、もっとも低い賃金で、従順、野心に乏しく仕事に従事する傾向に全般的にあり、他の労働者の繁栄にとって大きな障害となる」<sup>92</sup>。中国人移民の政治的立場とは関わりなく、革命軍側の一部に排斥の意図があったことがわかる。

メキシコ自由党の支持者でトレオン攻撃に参加したヘスス・フローレス Jesús Flores は、同年5月5日（メキシコがフランス軍を撃退した愛国記念日）、すでに革命軍が掌握していたゴメス・パラシオにおいて、次のように演説した。「すべての外国人は、すべてのメキシコ人労働者の汗によって裕福になったのであり、中でも中国人は女性の仕事さえ自分のものとし、女性から生活の糧

90 José Ángel Espinoza, *El problema chino en México*, 1931, pp. 72-73.

91 José Ángel Espinoza, *El Ejemplo de Sonora*, 1932, p. 29. 発音と文法に間違いがある。エスピノサ Espinoza は、1920年代から30年代における中国人排斥運動のリーダーである。

92 “Programa del Partido Liberal Mexicano,” *Actividades Políticas y Revolucionarias de los Hermanos Flores Magón, Documentos Históricos de la Revolución Mexicana*, vol. 10, Editorial Jus, 1966, p. 46, p. 60.



を奪った。そえゆえ、彼らを亡き者にすることは必要だし、愛国的である」<sup>93</sup>。「女性の仕事を奪う」という指摘は、民衆感情に訴えるものがあった。マデロも、メキシコ自由党の機関紙購読者だった<sup>94</sup>。メキシコ革命ナショナリズム形成には反中国人運動が重要な役割を確かに果たしている。

しかし、中国人移民とトレオン近郊のメキシコ民衆との関係、および虐殺や略奪の発生については、このような革命勢力の敵味方論で理解することはできない。メキシコ北部社会の歴史的な性格である武装民衆の伝統と19世紀後半から20世紀初頭における急激な変容との関連から検討する必要があるだろう。メキシコ北部社会には、入植者村落と支配を拒絶する先住民との間で衝突と交流の歴史がある。伝統的な北部の入植者集落は、アパッチやコマンチからの攻撃に備えた武装集落であった。例えば、チワワ州のナミキパと革命軍兵士との関連については、アロンソの研究が詳しい<sup>95</sup>。主流社会に従わない北部インディオによる入植村落への襲撃、逆に入植者によるインディオへの攻撃は1880年代まで続いた。

ラグナ地域の場合、開発の波の中で新たに北部に移住してきた民衆の対中国人認識も重要である。彼らにとっては、同じ時期に移住してきた競合者だった。成功を収めている中国人移民に対して、中央部から同時期に移住してきたメキシコ人が日頃からある種の嫉妬心を中国人に抱いていたと推測するのは容易である。トゥリータスの印象で示されている通りである（本稿21頁）。同様の印象を堀口九萬一も述べていて、日本人が標的になっていないのは、中国人移民ほどの成功を収めていないからだとして外務省宛に報告している<sup>96</sup>。また、フロー

93 フローレスの演説内容は雑誌『ディオゲネス Diogués』(1911年7月16日)の記事で掲載された。以下の清メキシコ合同調査団報告書に採集されている。Owyang King and Arthur Bassett, *Report of Messrs. Owyang King & Arthur Bassett, representatives of His Excellency, Minister Chang Yin Tang in an investigation made in conjunction with licenciado Antonio Ramos Pedrueza, representative of His Excellency, Francisco L. De La Barra, President of Mexico, of the facts relating to the massacre of Chinese subjects at Torreón on the 15<sup>th</sup> of May, 1911. Chinos en Torreón*, legajo II に所収。

94 “Francisco Madero a Ricardo Flores Magón,” (17 de enero, 1905), México, Secretaría de Hacienda Pública, *Epistolario (1900-1909)*, Tomo I, Archivo de Don Francisco Madero, pp. 109-110.

95 Ana María Alonso, “U.S. Military Intervention, Revolutionary Mobilization, and Popular Ideology in Chihuahua Sierra, 1916-1917,” Daniel Nugent ed. *Rural Revolt in Mexico: U.S. Intervention and the Domain of Subaltern Politics*, Duke University Press, 1998.

レスの前記演説は、中国人の成功はメキシコ人の犠牲で成り立っていると主張したものである。

特別な状況下で民衆が弱い移民集団に対して暴力を振るうことは、関東大震災での朝鮮人・中国人殺害事件で示されているように特異なことではない。関東大震災での事件とトレオンでの事件には、発生時期が秩序崩壊の特異な時期だった点、攻撃を仕掛けてくる、毒を飲料水などに入れたというデマなど、共通点がある。加えて、前述したように、米国南西部からメキシコ北部（米メキシコ国境地域）の歴史状況は民衆による暴力を助長する要因となっただろう<sup>97</sup>。

虐殺事件の現場であるトレオンの名（スペイン語で「大きな塔」の意味）そのものにも暴力の記憶が残されている。町はかつての農園の名を引き継いでいるが、ナサス川の川縁に1850年に建設され現在は失われた「大きな塔」に由来する名である。「大きな塔」は、水路建設のために四角で囲った堀の一角にあった。「大きな塔」建設の目的のひとつは、北方から襲ってくるアパッチを見張るためである<sup>98</sup>。

こうした状況は、21世紀まで続いているとも言える。例えば、メキシコ北部国境州を中心にして、2000年代から過激化した麻薬カルテル間の抗争において残酷な見せしめ殺戮が生じたことは報道で大々的に伝えられた。メキシコ北部が例外的事例ではない。ラテンアメリカ各地域で今日でも見られる過剰な暴力について、考察することが求められている<sup>99</sup>。

96 在墨国臨時代理公使堀口九萬一、外務大臣小林壽太郎宛「『トレオン』市ニ於ケル支那殺戮并ニ本邦人被害ノ風聞ニ関スル件」、明治44年（1911年）5月26日『墨国内乱関係帝国臣民ノ損害賠償一件』第1巻（5・3・2・154）、外務省外交史料館（国立公文書館アジア資料センター PDF 書類を参照）。

97 米国側でもこの時期マイノリティであるメキシコ系へのリンチ事件が横行している。もっとも知られているのは、1910年11月、テキサス州においてメキシコ人移民労働者アントニオ・ロドリゲス Antonio Rodríguez を住民らが留置所から連れ出し、石油をかけて燃やした事件である。ロドリゲスは白人女性殺害の容疑がかけられていた。Nicholas Villanueva Jr., *The Lynching of Mexicans in the Texas Borderlands*, University of New Mexico Press, 2017などを参照。

98 トレオンの由来である「大きな塔」については、Guerra, *Torreón*, p. 52, および Gildardo Contreras Palacios, *Antecedentes Históricos a la Fundación de El Torreón*, Editorial del Norte Mexicano, 1992, pp. 210-212. 後者は、Archivo Municipal de Torreón の Biblioteca Digital で参照した。http://www.torreon.gob.mx/archivo/biblioteca\_digital.html

99 Jean Franco, *Cruel Modernity*, Duke University Press, 2013.